Peshawar-kai

# ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.112
2012年7月4日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵　川沿いの家路（画・甲斐大策）


| | |
|---|---|
| 自然とは人の命運をも支配する摂理である～2011年度現地事業報告 | 中村　哲 |
| 2011年度会計報告 | ペシャワール会事務局 |
| 信じられないプロジェクトを完工 | アジズ・ウル・ラフマン |
| 治療続けながら医療スタッフに | アブドゥラ |
| 私の日課は敷地内の散歩 | 村井光義 |
| 悔しい経験から救急医の道へ～ワーカーＯＢ近況報告 | 西野恭平 |


**ペシャワール会は、1983年９月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。**

# 自然とは人の命運をも支配する摂理である

## 2011年度現地事業報告

**必要なものは多くはない。恐らく、変わらずに輝き続けるのは、命を愛惜し、身を削って弱者に与える配慮、自然に対する謙虚さである。現地事業がその思いに支えられる限り、恐れるものは何もない。**

ＰＭＳ総院長／ペシャワール会現地代表　中村 哲

### 二〇一一年度を振り返って

ペシャワール会の結成が一九八三年九月、現地活動の開始が翌年五月、「アフガニスタン」は日本から遠い存在だった。

当時、アフガン戦争（一九七九―八九）とソ連軍撤退が一時的に世界を沸かせ、忘れ去られていった。その後の経過を回顧するのは、気が進まない。恐れた破局が確実に現実化してゆく過程は、人間の愚かさをたどるだけで、元気の出ないものである。

大国の利のために武力や謀略が横行し、無数の犠牲を出した。そして、犠牲の殆どが罪のない弱者であった。この愚行が正当化され、拡大して現在に連続している。信ずべき「正義」は死んだ。

怪しげな進歩発展を謳歌する時代は終わった。今や人がカネを使うのではなく、カネが人を動かしているように見える。一国が滅びようと、生命が犠牲にされようと、利のためならなりふり構わない姿は、自滅の道を驀進する恐怖の戯画だ。

そして、この破滅への運動は、容易に私たちを誘惑する。刹那的な繁栄で物欲が刺激され、人為の架空が独り歩きする。この「注文の多い料理店」にとどまる限り、表裏にある暗い不安も消えないだろう。

医学を含め、今日私たちに突きつけられている最大の課題は、「自然と人間の共存」である。私たちは自然を操作し、人の意に従えるよう努力してきた。それが文明の発展であり、豊かさをもたらす最善の道だと教えられてきた。

だが、アフガニスタンで見る限り、事態はそうでもない。自然とは人の命運をも支配する摂理であり、人の意識の触れることができない一線を画して厳存する。

私たちは荒唐無稽なカルト集団の考えを

沙漠横断水路。木々の成長で、主幹水路が砂で埋めつぶされることがなくなり、年を重ねるごとに用水路は強くなっている（2012年4月）

マルワリード用水路流域の変化。
下はガンベリ沙漠横断路開通直後（2009年8月）、左は2年半後（2012年4月）

笑うが、時代が共有する迷信や倒錯から誰も自由ではない。近代技術が長足の進歩を遂げた今日、ともすれば、科学技術が万能で、人間の至福を約束するかのような錯覚に陥りがちではなかっただろうか。また自然を無限大に搾取できる対象として生活を考え、謙虚さを失っていなかっただろうか。自然はそれ自身の理によって動き、人間同士の合意や決まり事と無関係である。

大震災を経て、市場経済の破たんが世界中でささやかれる今、命はただ単に経済発展や技術進歩だけで守られないというのが、ささやかな確信である。

その一方で、新たな模索もまた、あらゆる分野で静かに始まっている。その声は今でこそ小さくとも、やがては人類生存をかけた大きな潮流にならざるを得ないだろう。

必要なものは多くはない。恐らく、変わらずに輝き続けるのは、命を愛惜し、身を削って弱者に与える配慮、自然に対する謙虚さである。現地事業がその思いに支えられる限り、恐れるものは何もない。

この一年間、立場を超えて人の温もりと良心に励まされ、無事経過したことを、感謝を以て報告し、一二年度も更に力を尽くしてゆきたい。

## 二〇一一年度の概況

### 気候変動

一〇年八月に発生した空前の大洪水はインダス河流域で甚大な被害を与えた。PMSの取水設備も至る所で改修を余儀なくされた。しかし、一一年秋から河の水位が急速に下降、逆に渇水状態に見舞われた。このため、小麦の作付けを断念した農家が多かった。

ヒンズークッシュ山麓全体で、従来はなかった気候変化が明らかに進行している。秋一〇月の局地的豪雨や春五月の台風並みの砂嵐などは、以前は見られなかった。全体に動きが大きく、予測しがたいものになっている。

一二年二月には渇水から一転、久々の豪雪と寒気がヒンズークッシュ山脈の東南部を襲った。だが、これは旱魃の終息を意味しない。気温上昇や夏の長雨で容易に河川が氾濫する。主にカーブル河本川で春の雪解けが洪水を成し、一二年四月二〇日、ジャララバードが記録的な洪水に襲われた。同市は一〇年八月の洪水にも影響がなかった地域である。

アフガニスタン全土の気候変化＝渇水と洪水の極端な同居、それに伴う取水困難と農業生産の低下が、直面する最大問題であ

ベスード第一取水口。カーブル政府灌漑局の調査団は、これを完全に新しいシステムと高く評価した（2012年2月）

ることを改めて印象づけた。

### 復興と撤退

一一年は欧米軍撤退への動きが加速した。民間人の犠牲者が急増する一方で、外国軍兵士も規律の弛緩や自殺が目立ち、末期状態を印象づけた。欧州軍を中心に撤退ムードが徐々に高まり、「治安権限移譲」地域が更に増えた。東部アフガンのナンガラハル州では、PMSの活動地の殆どが対象地区となった。

しかし、地上軍の移動が減っても、「誤爆」は日常的に続いており、市民の犠牲は減っていない。また、イスラム教を冒瀆する心ない事件が相次ぎ、外国兵に対する反感はいっそう強くなっている。

国軍や警察、官僚の育成は、欧米軍が浮き足立ち、即席にはできない現実がある。少なくとも東部農村では、国家機能がマヒ状態に近く、都市部の治安も更に悪化している。東部農村のプロジェクトは更に少なくなった。

### 無人機攻撃、パキスタン北西部の混乱

一一年五月、ビンラディン被疑者が殺害される頃、パキスタン国境沿いを中心に無人機爆撃が活発となった。反政府指導者が潜む場所だと判断されると、家屋や集落ごと葬り去るもので、巻き添えを食らった家族や市民の犠牲は膨大になると思われる。

一一年秋、「友軍」であるはずのパキスタン部隊が国境付近で無人機に攻撃され、多大の犠牲を出した。パキスタン政府はNATO（北大西洋条約機構）の軍需物資の輸送拒否を以て応じ、無人機に対する抗議の声を強めた。これによってNATOの軍事行動が著しく制約され、代ってタジキスタン経由の輸送が増加した。カイバル峠を越える補給路をめぐって、NATOとパキスタン政府との関係が一時緊張した。

### 無政府状態の拡大と農村自治

反政府勢力との交渉では、米軍が一転してアフガン政府の頭越しにタリバン代表と交渉し始め、情勢を複雑にした。もともと和平交渉はアフガン政府が以前から提唱していて、このための定期委員会も発足させていたが、この渦中で政府側代表（前大統領ラバニ師）が暗殺された。タリバン側は「外国軍引き上げを条件」とする姿勢を崩していない。

軍規も弛緩しがちで、外国兵による猟奇的な殺人事件、日常的な誤爆、無意味な虐待などが横行した。これに対し、激怒したアフガン軍兵士や警察官が、欧米兵を狙撃する事件も相次いだ。

一般農民とタリバン兵を区別するのはもはや不可能であり、「タリバン対国際軍」という図式も不明確である。反政府勢力は、アフガン系、パキスタン系が入り乱れた上、旧軍閥や犯罪者、タリバンを名乗る謀略が加わり、分かりにくいものになっている。「要するに秩序と平和が欲しい」と述べる者が普通で、外国の軍事干渉が混乱の元凶だと皆思っている。

この中で東部アフガン農村は、従来からあった自治性（＝地縁による結束）を一層強める傾向にある。各自治会を中心に、こ

の地縁関係は党派を超えて成立し、農村秩序の唯一の拠り所となっている。都市近郊では大っぴらな買収工作、投機的な土地の売買などで富裕層が潤って格差が広がり、自治の力が弱まっているものの、大半の農村では長老会が健在である。PMS現地活動の実質的な安全保障もまた、地域自治会との関係を抜きに考えられない。

## PMS事業の概況

東日本大震災の影響で、ペシャワール会＝PMSの予算は縮小を余儀なくされたが、一〇年度からのJICA共同事業の河川工事が継続されたため、規模は発足以来最大となった。治安悪化は事業進行に殆ど影響しなかった。

ダラエヌール診療所は変わらずに続けられ、ハンセン病患者の治療の場を再建することが課題になってきた。

灌漑事業は、マルワリード用水路の最終段階である保全態勢に着手すると共に、隣接地域の安定灌漑をめざし、取水堰及び一連の取水システム（取水門・主幹水路・調節池・送排水門・関連護岸など）の建設が次々と進められた。

ガンベリ沙漠開墾は、一一年五月の砂嵐と同年一〇月の鉄砲水、一一月のクナール河渇水で一時中断を余儀なくされたが、防砂林の植樹を活発化し、給排水路の整備が更に行われた。用水路は事実上シギ村落まで延長されることになり、一二年四月、洪水路横断工事が始められた。

長い対立が続いていたマルワリード対岸・カシコート地域は、一一年一〇月に和解が実現し、一二年二月、大洪水で破壊された主幹水路復旧と取水堰と一連の取水システム建設をめざして護岸工事が開始された。この結果、ジャララバード北部穀倉地帯（耕地一万六五〇〇ヘクタール、六五万人）の復活と安定灌漑をめざす「緑の大地計画」は、ほぼ仕上げの段階に入った。

ガンベリ沙漠の排水路敷設工事。排水路が整備されると、湿害の心配がなくなり、農場の開墾地を増やすことができる（2012年4月）

### 1. 医療事業

#### 最後の拠点

PMSに残った唯一の診療所がダラエヌールである。ダラエピーチ（クナール州）、ワマ（ヌーリスタン州）は戦場となって久しく、再開の目途は立っていない。

一二年、同渓谷は「ダラエヌール郡」として、独立した行政区画となった。旧シェイワ郡の人口が爆発的に増え、管理が行き届かなくなったためである。このため、診

未治療患者の菌検査をする中村医師（ジャララバード宿舎にて）

表１　診療数及び検査件数

| 国名 | アフガニスタン |
|---|---|
| 地域名 | ナンガラハル州 |
| 施設名 | ダラエヌール診療所 |
| 外来患者総数 | 52,420 |
| 【内訳】　一般 | 43,268 |
| ハンセン病 | 1 |
| てんかん | 524 |
| 結核 | 295 |
| マラリア | 5,412 |
| 外傷治療総数 | 2,920 |
| 入院患者総数 | 1 |
| 検査総数 | 11,998 |
| 【内訳】　血液一般 | 811 |
| 尿 | 2,257 |
| 便 | 2,842 |
| ハンセン病塗沫検査 | 2 |
| 抗酸性桿菌 | 250 |
| マラリア | 5,372 |
| リーシュマニア | 246 |
| その他 | 218 |
| 心電図 | ― |
| 超音波検査 | ― |

療所から小病院への格上げが問題になったが、行政手続きが煩瑣な割に実が伴わないと判断、時期をうかがっている。

### ハンセン病問題

ペシャワールの旧ＰＭＳ病院は、唯一残されたハンセン病診療施設として重きをなしていた。だが、戦乱で同病院をも失った現在、同病の治療は大きな課題である。

一二年三月、ペシャワール側から照会があり、未治療の患者が送られてきた。アフガン東部、とくにクナール州はハンセン病最多発地帯の一つである。しかし、無政府状態で本格的な動きができず、とりあえずダラエヌール診療所の一角を使用するよう検討された。

治療薬はナンガラハル州保健省の倉庫に眠っている状態だったが、行政側に訴え、その出方を見ている。アフガン側では、結核と統合した対策が表向き掲げられているが、診断・治療できる医療関係者が皆無で、事実上放置されている。カーブルとバーミヤンで長く活動していたドイツ系医療団体は既になく、期待がＰＭＳに集中した。

州保健省は興味を示し、その主催で指導的な医師層を対象に私中村が講義を行ったものの、実態は殆ど知られていない。しかし、この政情下で「ハンセン病どころでない」というのも本当で、ＰＭＳとて下手に動けば現地活動全局に影響が出る。しばらくダラエヌール診療所で小規模な診療を始めて静観し、患者数が無視できない状態になれば、再度行政側に打診、何らかの方策を立てる。

一一年度の診療内容は別表１の通り。

## 2. 灌漑事業

### ①取水堰と護岸

一〇年の大洪水に引き続き、季節外れの集中豪雨、記録的な砂嵐被害、渇水、豪雪、春先の洪水と、目まぐるしい自然の変化に振り回され、昨年度以上の努力を余儀なくされた。

一〇年九月に立てた計画は以下の通りで、マルワリード取水堰だけを除き、一一年度

ガンベリ沙漠の給水塔（平和ヶ丘）。用水路の水を 15m 揚水し、傾斜を利用した水やりは防砂林の保全を容易にした（2012 年４月）

末までに予定工事を全て完了した。

一. マルワリード取水堰・水門の全面改修
二. カマ第一取水門補修・堰の全面改修
三. カマ第二取水口の建設
四. カマ第二用水路・主幹一km建設
五. カマ用水路対岸の護岸工事と取水堰
六. ベスード第一取水堰及び一連の取水システム（カーブル河）建設
七. シェイワ取水堰の河道回復工事
八. ダラエヌール土石流路の護岸工事

### カマ郡・ベスード郡の安定灌漑

この結果、カマ郡とベスード郡全域で安定灌漑を実現した。これは長年の悲願であったが、難航すると見られたカマ第二、ベスード第一取水堰及び一連の取水システムの建設は、JICA共同事業として実現したものである。

ベスード郡のうちクナール河沿いでは、三・五kmの護岸工事が完了した。河道変遷で日常的に洪水にさらされていたタプー地域が守られ、タプー堰の建設で安定灌漑をも保障した。

「渇水・洪水の両者に耐える堰」は、現地農民の夢であり、緑の大地計画発足以来の最大の課題であった。だが、これら一連の工事によって、日本の伝統技術を範として完成度が高くなり、現在の程度の水位変動なら十分に機能することが立証された。

今後、この取水システムを他の場所に拡大すれば、相当の農業復興が期待できると思われる。

### カシコート取水堰・用水路計画

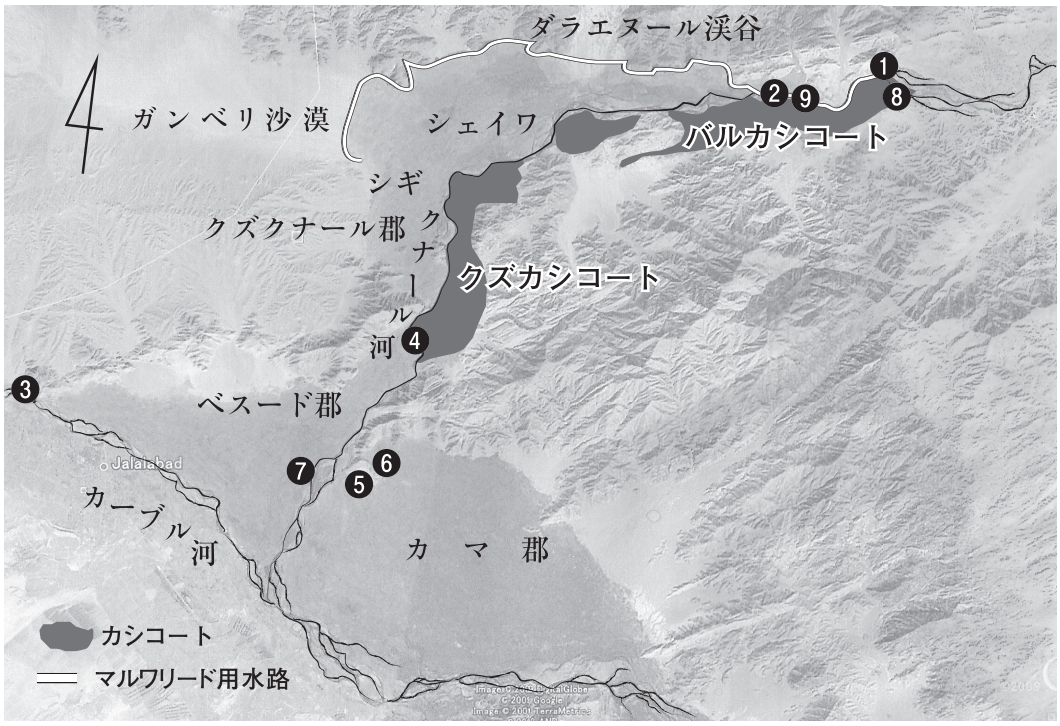
一一年一〇月、長く対立が続いた対岸・カシコート自治会との和解が成立した。対立の原因は河川工事をめぐるもので、クナール河右岸のマルワリード側ばかりが恩恵に及ぶ不公平感があった。実際、カシコートは最貧困地帯の一つで、緑の大地計画の筆頭に挙げられていたが、著しい交通不便もあって、事業が開始できないでいた。

一〇年の大洪水は、カシコートでも猛威をふるった。加えて前年〇九年、PRT（米軍地域復興チーム）の橋がクナール河の極めて狭い場所に架けられたため、激しい堰上がりを生じて広範囲が冠水、橋は折れ、主幹水路が濁流に消えた。主要河道が大きく村落に侵入し、年々浸食が進んでいたうえ、自力で取水口や主

表2　2011年度「緑の大地計画」の動き

| | | 2011上半期 | 2011下半期 | |
|---|---|---|---|---|
| | | 2011年4～9月 | 2011年10～12月 | 2012年1～3月 |
| カマI&II堰 | | 植樹 | カマII堰改修 | |
| ベスード護岸 | 洪水進入路 | 天端造成 | 河道回復、水制新設、ドレーン工 | |
| | タプー堰 | | 堰造成、主幹水路700m | |
| ベスードI堰 | | 巨石輸送・交通路建設 | 通水後に水門・堰・沈砂池造成 | |
| マルワリード流域 | 植樹・防砂林 | 給水塔I建設 | 給水塔II建設、果樹園着手 | |
| | 排水路 | 洪水路建設 | 第3排水路整備 | |
| | シギ村落 | | シギ堰回復 | シギ送水サイフォン着工 |
| | ジャリババ洪水路 | | 幅14mから35mに拡大 | |
| | D沈砂池 | 浚渫 | 洪水流入 | 沈砂池改修工事 |
| シェイワ流域 | | | シェイワ河道回復 | |
| カシコート | | | ショートカット工事 | 河道移動、旧堤防撤去 |
| 医療関係 | | | | ハンセン病問題 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 周辺の動き | ダラエヌール村落間紛争 | シギ・シェイワ間抗争 | 女子学童襲撃事件 |
| | | PMS・カシコート和解 | 反米暴動 |
| | | ISAF治安権限移譲 | |




**❶～❾はＰＭＳ建設の取水堰及び一連の取水システム**

❶マルワリード堰（2004～10）❷シェイワ堰（2008）❸ベスードⅠ（2006～12）
❹ベスードⅡ（2006～08）❺カマⅠ（2008～11）❻カマⅡ（2009～11）
❼ベスード・タプー堰（2010～11）❽カシコート堰（2012予定）❾シギ堰（2012予定）

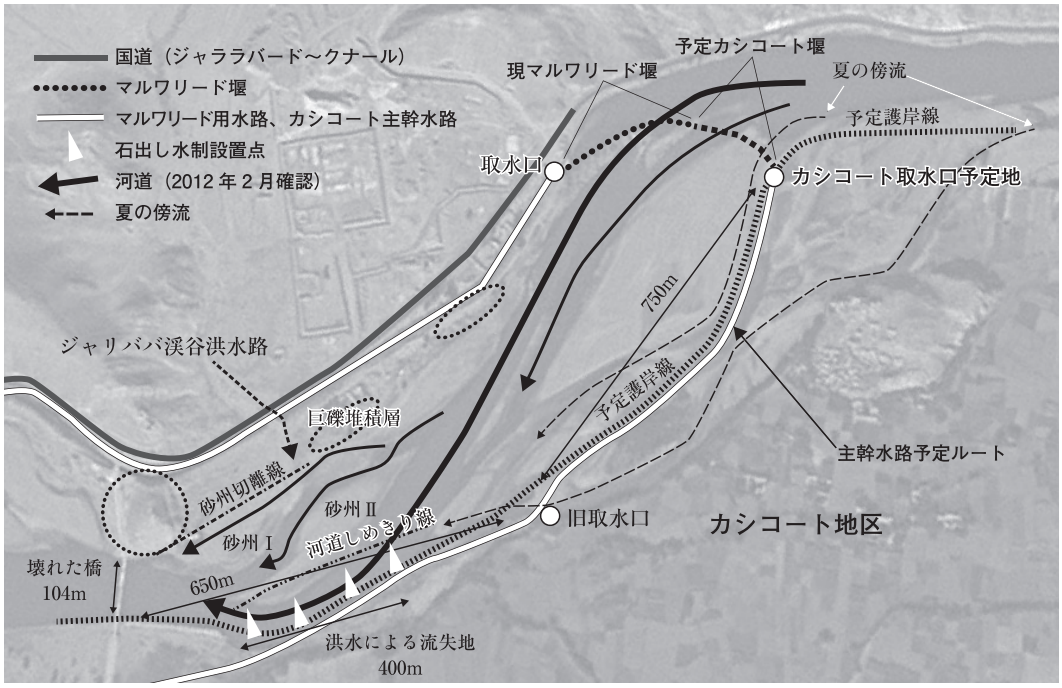


表３　現在までの植樹総数 ( 種類別・2003 年から 2012 年５月まで )

| 樹種 | 主な場所 | 2003～07年 | 2008年 | 2009年 | 2010年 | 2011年 | 2012年（5月まで） | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ヤナギ | 開水路内法（用水路内側） | 116,050 | 55,380 | 97,380 | 60,750 | 73,315 | 18,850 | 421,725 |
| クワ | 開水路外法（　〃　外側） | 7,000 | 2,750 | 8,578 | 4,430 | 140 | 292 | 23,190 |
| オリーブ | 開水路外法（　〃　外側） | 2,000 | 0 | 840 | 0 | 0 | 0 | 2,840 |
| ユーカリ | 河川護岸壁 | 2,500 | 1,000 | 11,478 | 39,584 | 22,350 | 14,163 | 91,075 |
| ビエラ | ガンベリ沙漠（養蜂用） | 0 | 300 | 600 | 1,165 | 165 | 1,420 | 3,650 |
| ガズ | ガンベリ沙漠（砂防林） | 0 | 15,100 | 71,300 | 14,356 | 9,887 | 17,028 | 127,671 |
| ポプラ | ガンベリ沙漠（木材用） | 0 | 0 | 0 | 4,900 | 10,786 | 1,850 | 17,536 |
| グラスキ | モスクなど建物の庭 | 0 | 0 | 0 | 60 | 195 | 300 | 555 |
| ザクロなどの果樹 | ガンベリＰＭＳ農園 | 600 | 0 | 0 | 193 | 0 | 6,034 | 6,827 |
| その他 | | 0 | 0 | 0 | 132 | 190 | 412 | 734 |
| | | 128,150 | 74,530 | 190,176 | 125,570 | 117,028 | 60,349 | 695,803 |

幹水路の復旧を行うのは不可能であった。一〇ヶ村のうち六ケ村がパキスタンへの難民化を決定していた。

一一年一〇月、窮したカシコート自治会がＰＭＳに救援を求めて謝罪、ＰＭＳ側が支援を確約した。翌一二年二月、予備工事の河道回復が大々的に開始され、取水堰、主幹水路の本工事は一二年一〇月に始められる。これによって難民化を決めていた村々は、留まるに至った。

その後の再調査で、マルワリード取水堰と連結して堰を築き、約一・五kmの主幹水路を建設すれば、一〇ヶ村・約三千ヘクタールの安定灌漑が実現することを確認した。

実現すれば、ジャララバード北部三郡（ベスード・カマ・クズクナール）計一万六五〇〇ヘクタール全域の安定を保障すると共に、対岸工事に悩んできたマルワリード堰の保全も容易になる。ここに「緑の大地計画」が大詰めを迎えた。

### ②マルワリード用水路

#### マルワリード用水路流域の保全態勢

用水路は完成しても、保全態勢の確立が最大の難関だと見ている。一一年度は、マルワリードを襲ったジャリババ渓谷（取水口から約五五〇ｍ地点）の鉄砲水で用水路約二〇ｍが破壊され、送水が三週間中断した。

洪水通過路の幅を倍増し、積年の懸案を払拭した。だが、この災害で流域農民は危機感を共有し、協力態勢を強めた。二五・五km全域で、浚渫作業を各村が担い、定例行事として定着させようとしている。

また、貧しい村々を主眼に分水路の整備、揚水水車の設置などが計画され、各村会と協力が進んでいる。この背景には、政治に対するあきらめと、支援が及ばぬ現実がある。皮肉なことに、外国支援の期待感が薄れるにつれ、自力更生の意欲が高まっている。

カシコート護岸。川幅を狭めていた旧堤防を撤去し、２段の新堤防を築造中。９基の水制を護岸壁に密着させる（2012 年４月 )

当分はＰＭＳが水主（みずぬし）の役割を担い、小水利施設などを整備し、流量調整や村落間抗争を収める。公的機関による管理は時期尚早である。

**表４　2011年度現地派遣ワーカー**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 村井光義 | 事務・現地連絡員 | 2005年3月～ |
| 2 | 村上　楽 | 医師 | 2011年10月～2012年4月 |

### シギ地域の灌漑

シギ村落群はクズクナール郡の約半分を占める。シギ取水口は長く荒廃していたが、マルワリード用水路が開通すると大半の農地を回復したものの、隣接するシェイワ村落群との抗争が頻発するようになった。

これは地勢上、平皿状の低地を通過して送水されるため、湿害の発生が起きやすいのである。そこで、シギ上流側はクナール河の小取水口から直接潤し、下流側はマルワリード用水路末端からガンベリ沙漠経由で送水すれば解決する。だが、沙漠西端の幅広い自然洪水路に阻まれて、計画が棚上げされていた。

一一年一一月、クナール河沿いで渇水が深刻となり、マルワリード用水路も一時水不足に陥った。ＰＭＳが手掛けたシェイワ取水口も河道変化で涸れ、シェイワ・シギ間で激しい対立が起きた。

元来、この取水口はマルワリード用水路を補足するために修復され、シギなどの他の村落も恩恵に浴する筈であった。しかし、シェイワの水番が適切な水量調節を行わず、他の村々を考慮しなかったので、気まぐれな送水で湿害が起き、渇水となれば真っ先に被害を受けた。

一一年一一月、ＰＭＳは多大の労力を割いて旧河道約八〇〇ｍを、四回目の工事で回復し、シェイワ取水口をＰＭＳの直接管理下に置いた。しかし、対立は根深く、シギ住民はシェイワ取水口の共有を頑なに拒否、河道さえも別にすることを主張した。ＰＭＳは、現場に集結して圧力をかける住民を一喝、河道を共有して無駄を省くべく説得、予定工事を断行したが、取水門は、やむを得ずシェイワ取水口に隣接して新設する計画を立てた。一方で、一二年四月、ガンベリ沙漠経由の送水のため、二五〇ｍの洪水路横断サイフォンが着工した。

これによって地域同士の対立は解消したが、アフガン農村を束ねることが容易でないことを改めて痛感した。今後もＰＭＳが現地と一体化し、地縁社会の重要な構成員となる以外に道はない。だが、このような実際的な処置を通じてのみ、現地の結束が実現する。実事業そのものが「自立定着村構想」の基礎だといえよう。

## 3. 農業・ガンベリ沙漠開拓

ＰＭＳ試験農場は現在、約四五ヘクタールが開墾されているが、一一年度は猛烈な砂嵐に見舞われて中断した。防砂林の拡張の必要が痛感され、植林に重点が置かれた。このために給水塔二基を建設、四kmに及ぶ林が保全・拡張されている。

ガンベリ沙漠の開墾可能地は、全体で約一千ヘクタール、隣接する村落間で一応の縄張りができ、現在のところ安定している。

ガンベリ沙漠の防砂林。幅100m以上、長さ4km（2012年4月）

ＰＭＳぬきに開墾ができないので、他の勢力もＰＭＳを介してまとまり、ナンガラハル州では最も治安の良い場所となっている。

なお、一一年一月から一二月までの植樹は一一七、〇二八本で、〇三年から一二年五月までの総植樹数は約七〇万本に達した（別表３参照）。そのうち、ほとんどが活着、枯れたものは補植している。

### ４．ワーカー派遣・その他

一一年度は、別表４のワーカーが事業に参加した。しかし、治安情勢を考慮し、現場に中村一名、ジャララバード事務所に村井一名で臨んでいる。

一二年二月一八日、カシコート・サルバンド村の作業地で、米軍ヘリが突然旋回して女子学童を機銃掃射、一六名が重軽傷（うち重傷六名）を負い、ＰＭＳが救援活動を行った。父兄や教師から懇請があり、防止のための校舎建設（約一六〇名収容）が予定されている。今秋の用水路工事期間に資機材を輸送して始める。

ザクロの挿し木。ザクロはアフガンの名物のひとつ。第二農場で6000本を挿し木した（2012年２月）

## 二〇一二年度の計画

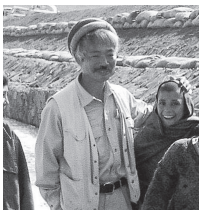
年度報告に述べた通り。

マルワリード用水路関係では、流域農民の結束で保全態勢を築くことが最大の課題となる。その他農地開拓、小水利施設、給排水路整備、植樹等、基本的にこれまでの連続。小水利施設の中では、シギ村落群へのサイフォン建設、流域の最貧困地帯のカンレイ村の揚水水車設置が大きなものである。

一〇年に予定したマルワリード取水門の全面的改修は、「カシコート以後」となる。一三年度に実施される可能性が大きい。

全体ではカシコート取水堰・主幹水路一・五㎞、同護岸工事が規模としては大きく、ＪＩＣＡ共同事業として実施される。これまでで最大の難工事となるが、実現すれば、マルワリード堰と一体化され、両岸の安定をもたらす。

女子学童校舎は、河川工事が難航すれば延期があり得る。



**中村（なかむら）　哲（てつ）**…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。以来二八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院ＰＭＳをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約五万二千人（二〇一一年度）。

# 11年度会計報告

## 2011年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。
期間　2011年4月～2012年3月

### 一般会計（単位:円）

［収入の部］

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 会費･寄付 | 289,478,473 ① |
| 2 | 補助金等 | 0 |
| 4 | 利息雑収入 | 313,837 |
| 5 | 収益事業収入 | 748,136 |
| | 年度収入計 | 290,540,446 |
| | 前年度繰越 | 62,202,321 |
| | 収　入　計 | 352,742,767 |

［支出の部］

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 現地協力費 | 169,442,246 |
| | うちPMS運営費 | 0 |
| | アフガン事業費 | 161,281,183 ② |
| | ワーカー費 | 983,268 ③ |
| | 渡航費 | 5,769,825 |
| | 国内活動費 | 1,407,970 |
| 2 | 広報費 | 7,456,259 |
| 3 | 事務局費 | 18,492,623 |
| | 年度支出計 | 195,391,128 |
| | 基金に繰入 | 100,000,000 |
| | 次年度繰越 | 57,351,639 |
| | 支　出　計 | 352,742,767 |

①個人会費寄付（個人18、301件／団体719件）
②農業用灌漑用水路建設
③現地支援ワーカー等
④カレンダー印税、写真使用料、送料収入
⑤売掛回収不能額
⑥事業所税等

### 収益事業会計

| | |
|---|---|
| ［収入の部］ | |
| 書籍売上 | 1,631,631 |
| DVD売上 | 996,050 |
| 雑収入 | 374,047 ④ |
| 売上収入計 | 3,001,728 |
| ［経費の部］ | |
| 書籍等原価 | 1,707,867 |
| 販売費 | 189,000 |
| 雑損失 | 11,025 ⑤ |
| 租税公課 | 345,700 ⑥ |
| 経費合計 | 2,253,592 |
| 当期収益（一般会計に繰入） | 748,136 |

### 「いのちの基金」残高

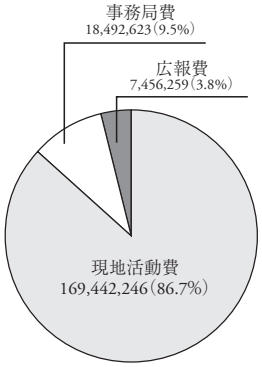
| | |
|---|---|
| 期首残高 | 50,000,000 |
| 一般会計から繰入 | 100,000,000 |
| 期末残高 | 150,000,000 |

### 未使用切手、書き損じ葉書の寄付

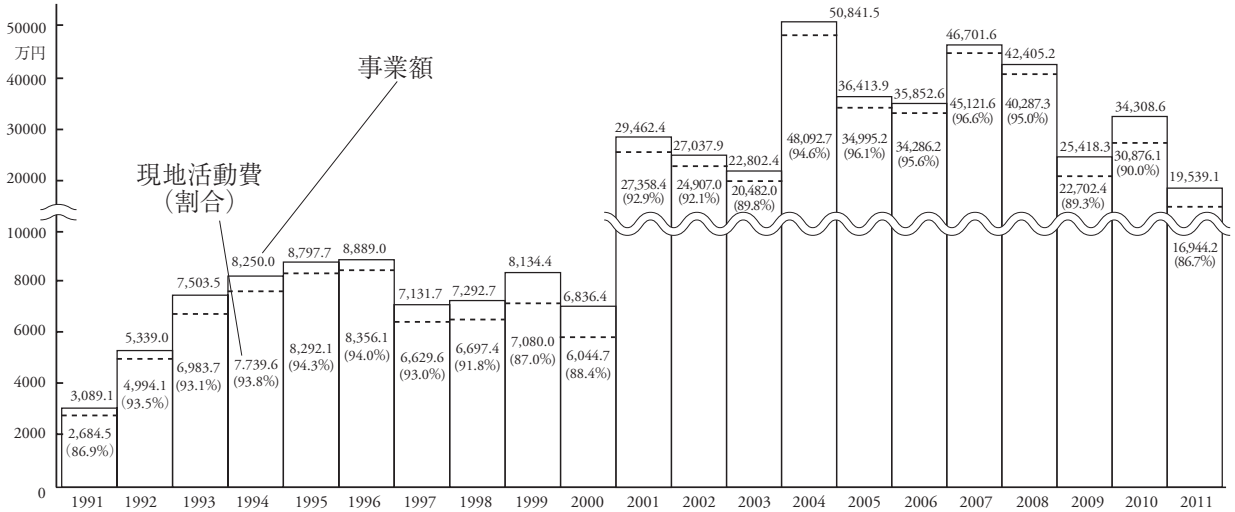
| | |
|---|---|
| 寄付いただいた件数 | 1,250件 |
| 未使用切手枚数 | 32,473枚 |
| 同　金額 | 3,634,796円相当 |
| 書き損じ葉書枚数 | 58,142枚 |
| 同　金額 | 2,751,116円相当 |
| 合計金額 | 6,385,912円相当 |

＊会報発送費用の節約になっています。

●2011年度事業額（支出ベース）
195,391,128円




## 事業規模（寄付件数・事業額）の推移　1991～2011（年度）



# 信じられないプロジェクトを完工

PMS職員
アジズ・ウル・ラフマン

## 大きな誇り

私の履歴を語るにあたり、まずは最大の敬意をこめ、そして大きな誇りをもってPMSに参加した経緯からお話させて頂きます。私はPMSの一員として迎え入れて頂いた事を本当に嬉しく思っています。

私のこの素晴らしい経験が始まったのは一九九九年、パキスタンのペシャワールPMS病院でのことで、当時は外来患者の事務担当でした。私の業務の主な目的はPMSの円滑な運営に努めることでした。

PMSはペシャワールで主にらい（ハンセン病）患者と貧困層の診療を目的とした病院でした。アフガン難民の診療もしており、毎日二五〇～三〇〇人の診察を行っていました。無料の検査・投薬・外来診察を提供していましたので、彼らにとって大変大きな助けとなっていました。また、入院ベッド七〇床を擁し、てんかんやらいに類似した疾患の治療も行っていました。

時には末期患者のためにも使用され、貧しい難民の苦労を軽減する役目を果たしていました。私は日々自らの仕事に誇りを感じながら登録簿に患者の記録を記載したものです。

三年後、外来受付の仕事に移りました。この業務もまた患者に奉仕し、かつ円滑な診療に貢献できるやりがいのある仕事で、二年間勤めました。実に大勢の患者がPMSに押し寄せました。

## 食糧配給プログラムに参加

前述したように、患者への薬の処方は無料でしたので、ペシャワール在住の特に貧しいアフガン難民は多大な恩恵を受けていました。

さらにペシャワールの病院まで来ることができない患者も多くいたので、らい多発地＝医療過疎地であるコーヒスタンやチトラルのラシュトといったパキスタン辺境地の貧しい農村地域に診療所を開設しました。優秀なスタッフで構成されたチームが運営にあたり、私も参加しました。これらの診療所では外来診療を行い、同地域の貧しい住民に質の良い医療サービスを提供して彼らの生活に大きく貢献していることを私自身この目で確認しました。

私はかねてより貧しい人々に奉仕することに強い関心を抱いておりました。二〇〇一年一〇月からおよそ一五万人の人々にギー（調理油）や小麦粉を配布したPMSの食糧配給プログラムに参加しました。このプログラムにより、養うべき家族を抱え困窮状態にあった人々を大いに助けることができました。バザールでの物価上昇に多くの人々が困っていましたが、最も貧しい人々、死に瀕しかねない飢餓状況にある人々から援助していくようにしました。

## あり得ないと思われていたこと

その後様々な事情があって、PMS事務所

右がアジズ・ウル・ラフマン氏（左は会計担当ハニフラ氏、カシコートにて）

D調節池の水門横のぶどう棚

もドクター中村の拠点もアフガニスタンのジャララバードに移ることとなり、まもなく私はマルワリード用水路建設の現地事務所に職場が変わりました。同工事はジャリババから始まり、ガンベリ沙漠に到達しました。

これはアフガニスタン人にとって信じられないようなプロジェクトで、どんなに頑張ってもガンベリ沙漠で灌漑などあり得ないと思われていたのですが、我々はまさに必死で働き、三五〇〇ヘクタールの土地に給水できる水路を建設したのです。これにより同地域の土地の価値も上がり、工事開始前は一〇〇平方メートル一万五千アフガニ（一アフガニ＝一・七円）だった地価が、工事開始後には五～六倍になりました。

ドクター中村が始めたPMS水路建設により、ガンベリ沙漠にまで水が届き、そこで一千ジェリブ（二〇〇ヘクタール）の土地が潤い、作物が育つようになったのです。さらに何万本もの樹木を植えて防護林とする植林事業が現在も続行しています。

この事業により何千人もの住民に雇用機会が与えられ、仕事に没頭できるおかげで自爆テロや爆破行為など非道な行為に走ることを防ぐことにも役立っています。

## 生活の変化

ここでの私の職務は事務業務、現場作業員との連絡業務、現場で起きる諸問題の解決、プロジェクトが直面する問題を地方政府と連携して解決すること、大勢いるPMS現場スタッフの監督などです。

忘れてならないことは、このPMSの事業によって収入を得られることによる現地住民への経済効果です。このことは彼らにとってとても大事な生活の変化です。この水路によって水が得られるおかげで、住民は村を捨てて他所に移らずに済むようになりました。

2010年夏の大洪水で折れたカシコート橋

工事開始後、ナンガラハル州クズクナールの住民が、自分たちも水路建設に参加して取水口を設置し水不足を解消したいと申し入れてきました。自然の摂理によって水位が低下する冬季は、多くの人が思うように作物を栽培できないという状況がありました。

そこでPMSはクズクナール住民のために〇七年にシェイワ取水口建設に着手しました。その三ヶ月後に完成し、現在は冬季でも安定した取水が可能で、作物が栽培できるように

なっています。ＰＭＳの事業のお陰で、クナール河の水位が上下しても住民たちは問題なく農地で作物を育てることができるようになったのです。

### ベスード取水堰の意義

ＰＭＳが行っている素晴らしい事業についてもう少し書かせてください。ＰＭＳは立派で美しいマドラサ（学校）とモスク及び寄宿舎を建設しました。ここには厨房も完備されています。この建設事業は〇七年に着工しました。これは貧しい人々のため、そして子どもらの教育のために行われた奉仕事業の最良の事例といえます。

ベスード護岸ー石出し水制群。40mの水制にダンプカー500台を投入した（2011年11月）

またカマ郡はナンガラハル州の大変重要な穀倉地帯で、水さえ十分にあれば様々な穀物や野菜がたくさん収穫できる地域です。ＰＭＳはここの二ヶ所に頑丈な取水口を建設、現在七千ヘクタールの土地に給水しています。これにより多くの家族が別の土地に避難しなくてもよくなりました。経済状況も良くなり、住民は安心して暮らすことができるようになりました。

一一年には同州ベスード郡の貧しい住民のために取水口を建設しました。これはこれまでにＰＭＳが建設したものの中で最も基本的かつ最良の取水口で、現在少なくとも農地二千ヘクタールを潤しています。これによりベスード住民の生活は改善され、収入も以前の二倍に増えました。今後、さらに彼らの生活が大幅に向上する可能性が見込まれます。

最後に、ベスードの護岸工事のことに触れます。これは、クナール河が氾濫して農地が破壊される危険があったため長年同地域の農民が望み、何とかしようと考えていたものです。プロジェクト着工後、この護岸がもたらす恩恵と今後洪水被害から守られるということで、地域住民は我々の職場環境を改善したり職員の安全を確保するなど、惜しみない援助と協力をしてくれました。

ＰＭＳのようなＮＧＯの事業現場に赴く職員にも今では武装した者が同行しています。しかし、活動地のまわりがどのように変化していったとしてもＰＭＳは特定の思想や政治的団体を益するものではなく、その活動の唯一の目的はアフガン国内外の困窮する人々を助け、彼らに奉仕することです。

このような素晴らしい組織を結成し、その基礎を築いてくださった方々に深い感謝を申し上げます。そしてアフガン人の命を救い、彼らが難民にならないよう貢献して来て下さった皆様に神の祝福がありますように。

困窮するアフガン人を助け、救ってくださった日本の方々に心からお礼を申し上げます。

最後になりましたが、この報告の中に万一誤記があった場合には深くお詫び申し上げます。

**▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼**

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

# 治療続けながら医療スタッフに

ダラエヌール診療所・看護助手
アブドゥラ

## 一〇代で発病

私はサマンガン州出身モハマッドウラーの息子、アブドゥラと申します。生まれたのは一九六八年で、家族は母と姉が一人います。

父が他界してからは叔父と住んでいましたが、アフガニスタンで厳しい生活状況にあった一九八〇年代後半、一〇代の時に痛みを伴わない皮膚の異変に気付き、ペシャワールで治療を受けるためにパキスタンに行きました。そこからラワルピンディ・らい（ハンセン病）センターに送られ、らいと診断されて投薬治療を開始しました。

その後、らい病棟をもつペシャワールのミッション病院に転送されました。二ヵ月後、らい病棟から退院して今後は自宅で治療を続けるように言われました。

しかしその当時アフガニスタンは戦争中で荒廃していて、故郷に戻るのは困難な状況でした。そこでドクター中村に相談すると、「それなら、らい病棟の患者の世話をしながらミッション病院で治療を続けなさい」と言ってくださいました。その後、病棟で日本人スタッフやアフガン人スタッフに助けてもらいながら、徐々にらい患者の世話に関する知識を蓄えて行きました。

## 医療補助スタッフに

ほとんどの入院患者は体が自由に動かなかったので、患部への薬の塗布を手伝ったり、傷の治療や食事の介助、らい患者用のサンダル製作の訓練などを続けました。二年間の治療が完了して健康になってからは、医療補助スタッフとして病院で勤務することになりました。〇八年、ペシャワール情勢が悪化したためペシャワールからアフガニスタンに転任し、ダラエヌール診療所で患者の世話にあたることになりました。

アフガニスタンに戻ってからは、ＰＭＳが農業・飲料水供給・灌漑事業・医療など様々な分野で活動し、貧しく援助を必要としているアフガニスタンの人々を助けている姿を目の当たりにしてきました。

そこでドクター中村と日本の皆さんにひとつお願いがあります。それは、何とかアフガニスタンにらいセンターを一箇所開設できないかということです。ＰＭＳはらい治療の経験が豊富ですし、アフガニスタンにはらいセンターがひとつもないからです。

有難うございました。

診療所で子供の体重測定中のアブドゥラ看護助手

**▼寄付をしてくださる皆さまへ▼**

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

## ◎ワーカー通信

# 私の日課は敷地内の散歩

ペシャワール会事務局・現地連絡員
村井光義

### 全職員は一一三名

今回はジャララバード事務所を紹介します。

現地事業実施団体はPMSジャパン（Peace Japan Medical Services　平和医療団日本）と呼ばれ親しまれています。

全職員一一三名のうちジャララバード事務所で働く職員（事務・会計、運転手、修理工、コック、門衛）は約三〇名。主な仕事に政府・日本へ事業報告、政府・地域住民との渉外、資機材手配、現場作業員管理、車両管理、会計があります。

事務所は政府から一〇年間無料で借りている一ヘクタールの土地に六年前に建てられました。

事務・会計を担当している職員は、バザールで物品購入、政府への書類提出、工事現場視察、給与配布などで日中は殆ど事務所にいません。広い敷地には、資機材置き場、倉庫、洗車場、車両修理場、給油所、畑、職員たちの寄付で建てたモスクがあります。

隣国から輸入される資材（セメント、鉄筋、蛇籠用針金）は、市場での在庫や価格が不安定なため、ある程度手元に確保しています。

### 重機は一三台、車両二四台

五〇キロに及ぶ広範囲で土木工事をしているので、ダンプカーやユンボ（掘削機）などの重機を一三台、普通車両などを二四台所有しています。支出に占める割合も大きいため、燃料管理や適切な修理は重要で、給油や修理は事務所内で行います。軽油（タンク容量二万リットル）は一カ月半、ガソリン（タンク容量五千リットル）は三カ月で消費されます。

修理工はエンジンを組み立てることもできる程の技術と経験がありますが、自分達だけで修理が困難な場合は、バザールの修理工を事務所に呼びます。必要のない修理や、正常部品の紛失を防ぐため、目の届くところで一緒に作業します。

彼らは自動車修理だけでなく配管工事、電気工事もでき、以前宿舎に太陽光発電装置を導入した際は、太陽光パネルのフレーム作成、設置、配線すべてを行いました。これまでは軽油を使って発電機で電気を起こしていたので初期経費は掛かりましたが、二年間使用すると元が取れる見込みです。

### 季節野菜を栽培

畑では、季節の野菜（トマト、キュウリ、玉葱、人参、大根、香草など）を栽培し、毎

ジャララバード事務所に設置される給油タンク

食サラダとして楽しんでいます。果樹（柿、杏、無花果、柑橘類など）も育ち、芝生も整備されています。植物に全く興味がなかった私も、自分で植えてみると愛情が湧いてきました。

私の日課は敷地内の散歩です。日頃の運動不足を顧みてのことですが、職員との会話は関係を深める貴重な時間であり、資機材を見渡すことは現場からの発注対応に役立ち、植物の生長に太陽と水の力を実感しています。副院長が飼っている二匹の犬も眺めているとホッとします。

### 皆でアイディア

先月、強い日差しによって車両が傷むのを防ぐため、運転手や修理工の強い要望で、屋根付き駐車場を皆で作りました。車両の壊れた部品などの鉄屑、オイルの空容器、古タイヤやバッテリーを売却し、その費用に充てました。

これからも職員と共通のものを見て、一緒に考える中で、皆でアイディアを出し合い実施していきたいと思います。

完成した給油所

よく手入れされたジャララバード事務所の前庭

野菜や果物の畑があるジャララバード事務所の庭

●ワーカーOB近況報告

# 悔しい経験から救急医の道へ

元PMSワーカー・医師
西野恭平

ご無沙汰しています。現地ワーカーとしてダラエヌール診療所で活動していた西野です。

日本に帰国してから、早いもので既に四年半が過ぎました。帰国後は、半年ほどミャンマーで活動した後、現在は東京で救急医として勤務しています。

ダラエヌール診療所での活動を振り返ると、仲間に恵まれ、楽しかった事ばかりが思い出されますが、肝心の医療の面では至らなかった点が多々あったと感じています。

診療所での活動時代、「ここでは対応できない」と自分に言い訳しているだけで、実際は「自分には対応できない」といった患者さんが数多くいました。

帰国後、ダラエヌール診療所での悔しい経験から、少しでも自分の医師としての幅を広げたいと思い、小児科医から救急医への道を選択しました。日本に戻って来てから自分がどれだけ医師として成長したかは定かではありませんが、それでも今ならあの人には対応できたとか、あの時はこうすれば良かったんじゃないか、と思うことがしばしばあります。

会報で現在もダラエヌールで変わらず診療活動を続けるスタッフの姿を見ると、またいつの日か一緒に切磋琢磨し、ダラエヌール診療所をより良い診療所にしていく過程に参加したいという思いが募ります。

私事ではありますが、帰国後、家庭を持ち現在は二児の父親となりました。現在、PMSの活動に参加する機会は減ってしまいましたが、常に家族を大切にし、地域のために一途に働き続ける現地スタッフの姿を手本とし、今は新しい立場で自分の役割を務めていきたいと思っています。

最後に、中村先生を始め、スタッフ、事務局および会員の皆さんに支えて頂いたことを改めて感謝申し上げます。

**▼受領確認ハガキが不要の方へ▼**

＊お払込の際、受領確認ハガキをご不要の方は用紙の通信欄の「不要」に○印をして頂ければ助かります。

**▼未使用の切手、ハガキを！▼**

＊会報の発送等の通信費は皆様からお送り頂いた未使用の切手、書き損じハガキ等で半分が支払われています。今後もご協力いただければ幸いです。

（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

サファル・バハエル！（良い旅を）――――9

## 「カーブルなんだから…」

甲斐大策

四月末の金曜日、早暁のカーブルを霧が包んだ。季節は変わる。

ハジ・ヤナルは、この街に十九世紀初頭から根を下ろしたウズベク一族、六代目の長老である。旧市街のチャハル・チャタ市場角地に百年近く続く二階建てのチャイハナを所有、バルフの羊に限る商いもしてきた。極上の羊肉は旧王室の後ろ楯をもたらし、王制消滅後も四十年近く、国情の激変にもかかわらず軋轢なしにパシュトゥン地区で生き永らえてきた。

この日もハジは、プル・イ・ヘシュティ（煉瓦橋）モスクで朝の礼拝を終え、市場へ向かった。

モスクを退出する時、誰もが静安な空気を纏っている。そして個々の俗世、厳しい現実へと散っていく。

車の往来を気遣いながらハジが大通りを渡り始めた時、上空を舞う鳩の群が一瞬混乱を見せ、同時に路上の人々も、空中を鋭く貫いていったいくつかの飛行体を感じた。しかし、立ち止まる人はいず、ハジも真直ぐチャイハナへ車道を渡り切った。

カバブを焼く煙が匂いと共に歩道を包む。ハジの弟ハッサンが、ナンの切れ端を路肩に撒き、雀たちが群がっている。

ハジがチャイハナの経営をハッサンに委ねて十年になる。二階からはアルモニアムとラバーブの音合わせが響いてくる。

「サラーム、ハッサン、結婚式が……？」

「やあサラーム、ハジ。そうなんだ。午後一杯、二階が貸し切りだ。」

十七歳になる弟の長男が店頭で叔父への挨拶も上の空に、新市街から届くアメリカ製消防車の外洋船の汽笛にも似た警笛が去る方角、川向う、ビル街の彼方を見ている。

「カァカァ（叔父さん）、また連中のランチャル（ロケット砲）ですかねェ。」

ハジは甥の関心を無視、白い顎髭を右手でしごいて店に入りながら呟いた。

「ここはカーブル、……カーブルなんだよ。」

●事務局便り

＊二〇一一年度は、完工したマルワリード用水路二五・五キロのメンテナンス（改修・給水路・排水路工事）だけでなく、カマ、ベスード、シェイワ、カシコートと多岐にわたる地域で、工事を行った。なかでもカマ地区の取水口建設・ベスードの護岸工事をPMSとJICAとの共同事業とすることで、これまでの現地事業に新たな一頁を開いたが、さらにJICAとの共同事業でマルワリード取水口の対岸カシコートの治水事業（基礎工事・河道変更／秋に取水口建設）にも取りかかることになった。一NGOの治水プロジェクトがモデルとなり、将来アフガン全土に適用されることが期待される。

財政については、昨年三月一一日に発生した、東日本大震災、福島原発事故発生に関し、本会も、会報発送の延期や郵便振り替え用紙の同封を控えるなどして対応したが、最終的な会費と寄付収入は平年並みに落ち着いた。現地事業についても大幅な計画縮小がなされたため、収入の一部を基金として積み上げることとなった。ご支援に感謝するとともに、いまなお震災の被害に苦しんでおられる方々の心の安寧をお祈りしたい。

＊DVD「アフガンに命の水を」（土木学会第24回映画コンクール最優秀賞を受賞）は、約五千本を販売し数万人の方々に観て頂いたが、第二弾のDVD「アフガニスタン　干ばつの大地に用水路を拓く　治水技術の7年」（企画ペシャワール会／制作日本電波ニュース社／朗読菅原文太／73分／二六二五円）が発売になった。今回は用水路の技術的な解説にも力を入れているので、より深く現地事業をご理解頂ける作品になっている。各地での上映会も企画頂けると幸いです。

ペ村から――――――――――♪

初めてアフガニスタンに行ったのが一九七二年、ペシャワール会を知ったのが二十数年前、そして事務局のお手伝いをさせていただくようになって三年になります。アフガニスタンを訪れた時は王政時代でその翌年に王政廃止、その後のソ連の侵攻には心が痛みました。深く澄んだ青空、初めて経験したすごい乾燥、バーミヤン渓谷、カーブル美術館のガンダーラ仏、おいしかったハルブザ（瓜）など本当に昨日のことのように思い起こされます。アフガニスタンが一気に好きになったのでした。そこで活動される中村先生が隣の市のご出身ということもあり、何かお手伝いできたらいいなあと思っていました。現地の台所の仕事でもいいけど退職後の六〇歳には自信がありませんでした。そしてやっと事務局のお手伝いができるようになりました。アフガニスタンの人々とどこかで繋がっていることを感じながら。感謝です。（YM）


医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録　【3刷】1890円

辺境で診る辺境から見る　【3刷】1890円

医者 井戸を掘る　【10刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ダラエ・ヌールへの道　【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

アフガン 農業支援奮闘記　高橋修・編著
農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者の物語　甲斐大策

1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る
アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）　1995円

岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　電話03(5210)4000

価格はすべて税込価格（税5%）です


会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。


発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2012年7月4日　No.112　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲　名誉会長　高松勇雄